



牧野スクールの学生8名とワーキングビジター

希望を忘れずに

三浦 照男

2年前、ある方の紹介で、持続可能な農業研修コースにアラハバード出身の若い女性2名が入学をしたいと言ってきました。私は彼女らを知りませんでした。農業研修を希望するインド女性が少ないこと、また、10ヶ月もの長期間親元を離れて研修する女性が今まででいなかったこと、そのような彼女たちの存在がアラハバード農村女性に対してよい刺激になると思ったこと、これらを鑑み、期待を持って、彼女たちの入学を許可しました。

しかし、研修開始後、私はこの入学許可が失敗であったことに気づきました。一人は研修をほったらかしで、色々な理由をつけ実家に帰省ばかり。もう一人は研修期間中に、親が決めた者との見合い、婚約式、宗教儀式で、しょっちゅうクラスを休み、ついにコース修了前に結婚してしまいました。結局、二人とも退学処分となりました。この時、アラハバードの女性に対しての研修がいかに難しいかということを知りました。

「しばらくはアラハバードから女性の学生を取らない」と心に決めていたのですが、今年の春、昨年からは農村保健ボランティア (VHV) のアシスタントとして活動していた若い女性2名、プジャとサビトリが10ヶ月コースに入学したいと申し出てきました。彼女たちは農村で母子保健活動に単に参加していたばかりでなく、新しい知識技術を早く理解し、有能なリーダーシップを発揮していました。通信制の大学を今春に卒業したこともあり、読み書きもしっかりしていました。

彼女たちに「何故入学したいのか」問いました。「色々なことを学びたい。家庭菜園をもっと広めたいので農業も学びたい。英語も話せるようになりたい。そしてもっと外国の人とも直接話したい。それから出来たらスクーターも乗れるようになりたい。そしたらVHVを連れてもっと遠くまで活動できる。。。」次々と彼女たちの挑戦したいことが口に出てきます。

彼女たちとの面談で私は力を得たようにでした。そして「希望を持ち続けること」「挑戦することの大切さ」を改めて教えてくれているようでした。過去の失敗に捉われていないで「希望を忘れずに」と。